第1296号　【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】　みいけ　（毎月2回1日16日）　1987年6月1日（月）㈡

「希望退職」という名の首切りはごめんだ

「統合」は閉山だ。「希望退職」は首切りだ。と職場ではさまざまな話題でもちきりです。その声の一部をレポートしてもらいました。

早期閉山にらんだ第一次「合理化」

広がる不安と怒り

十五日の「合理化」提案は、ある程度予測されていたとはいえ、内容がきわめてきびしいものだけに四山鉱の職場では、よるとさわると「合理化」の話ばかりで、どうなるのかという先行き不安が広がっています。

まず第一に、「統合」という名の四山鉱閉山です。

三百五十万トン体制の内容は、深部採掘をやめ、山はねのおそれのある切羽をやめ、高硫黄炭の採掘をやめるとあります。四山鉱では提案される前からその前提で払計画が進められており、三月の配転からみて、今回の「希望退職」の肩たたきが、四山鉱を中心に行われるのではないかという不安です。

『可採炭量があっての中止。櫓や施設を残すといっても坑内では撤去が始まってる。組合も会社の提案は〝生き残り〟のためには仕方がないと認めている。もう、どうにもならん』

『三池は黒字。北海道や鉱害のほうに儲けばまわしよるけん辛抱せいというて、切り捨てる時は一番じゃからナ』

『機械ば入れたけんていうて、五〇%も能率がいっぺんに上がるナ。労働者を減らして生産第一、また災害の起こるバイ』

『希望退職の予定数が出らんなら「肩たたき」がはじまると誰もが思っている。今やめても仕事はなか』

『就職希望する者には、会社が千百人ほどの受け皿のあると言うたそうだが、東京・大阪で仕事の内容、賃金もわからん。無責任な話バイ』

『それば「統合」と言うとかんと、四山鉱閉山なり閉鎖というたら、大牟田、荒尾に与えるショックが大きいからで、名前まで「第一鉱」「第二鉱」として手のこんだ芝居ばしよる。四山鉱の鉱区の採掘ばやめるとやけん、閉山たい』

職場における『合理化』の中身について、話は尽きません。

新労、職組の条件要求の方向で「合理化」提案は認められようとしています。六月はじめから「希望退職」の募集があり、株主総会までに会社はある程度のメドをつけたいのだとささやかれています。

次つぎに「合理化」が

会社の当初の計画によると、四山鉱閉山は六十三年の秋でした。それが一年早くなったということです。会社は、その理由として、円高による内外炭の価格差の拡大、第八次政策にそった体制づくりとしていますが、今日の政治、経済情勢が自民党政府のもとで、「悪化」することはあっても良くなることはありません。

『一千万トンもキープされたものではない。鉄や電力、セメントがいらんというたらそれまでだからナ』

『貿易黒字で農産物と並んでアメリカの石炭ば買えといわれよる。国内炭の切り捨ては早くなると報道されとるからナ』

『会社の「合理化」も、これで終わりじゃない。生き残るためと言うて、労働者だけに犠牲ば押しつけてくることは間違いなか』

『三池炭鉱が縮少「合理化」しているんだから、よその炭鉱も右へならえで「合理化」を出しよるけど、閉山はなだらかでなく急激になってる』

『高島炭鉱の労働者の就職も二百人ぐらいだということだ。三菱グループも視察といっても形式的に来ただけで終わっている。あとは野となれ山となれだ』

『三井もそうするだろうな。就職を希望する者の「あっせん」だけで、なにもない』

『大牟田、荒尾は失業者の街になってしまう』

『ここで儲けるだけ儲けて、喰い逃げは許されない。たたかういがいに生きる道はない』

話は、堂々めぐりをするが、会社の「合理化」にたいするたたかいは始まったばかりであり、三池の早期閉山を許さない労働者の怒りは日ごと高まっていくに違いありません。

（村中　利行）

きびしい坑内労働を終えて入浴。話題はもっぱら今後の「合理化」のことばかり。

組織の別なく はね返す決意を

「きびしかな」、合理化提案後の現場の声です。マスコミの報道が繰り返されていたが、やはりショックは大きいものでした。

いち早く新労組は条件つきで受け入れることを決めました。しかし組合員は、「説明では第二、第三の合理化はないというが、三百二十人も希望者があるじゃろか」「五十歳までの枠をはずすなら、定年退職の分の不足はどげん考えとるとやろか」「今やめたら就職は困難。希望退職が満杯するとは思えんし、肩たたきがあると考えるのが当然だ。定年まであと二年、絶対おれはやめん」「入社してまだながくない。どっちがトクか考えよる」

「参院予算委員会で青島議員の『閣僚の方はどういう態度で閣議に臨んだのか、……あなたたちは身の安全にきゅうきゅうとして…全員腰抜けだ。責任を全うしていない。アホですよ』の発言ばっちの執行部にそんままやろごたる」など、不安と怒りでいっぱいです。

希望退職者が満たされないと、次は肩たたき、指名解雇、これが今までつかわれてきた会社の手段です。しかも三百五十万トンで安定する保証もなく、第二、第三の人員整理が考えられます。

労働者だけにしわよせされ、大牟田、荒尾地域の崩壊につながる合理化は認めることなできません。わたしたちのいのちと生活を守るために、組織の別なく一つになってたたかうときではないでしょうか。肩たたきがあったら、断固としてはね返す決意が必要です。

（田中　教幸）

高島はいま…

第八次石炭政策をまたずに昨年十一月に閉山に追い込まれた高島町では、三菱高島礦が閉山して半年を過ぎました。

三菱グループは、就職あっせんに努力し、企業誘致もすると約束していましたが、閉山前から心配されていたように、町そのものが存続するかどうかの危機が現実のものになっています。

閉山時には五千五百人いた人口がすでに半分以下に減り二千五百人。高島小学校では児童数四百五十人が百二十人に。高島中学校でも二百八十人から百人に減っています。

当時八百七十人の直轄鉱員のうち六百九十人が島を離れましたが、遠隔地を含めて就職したのは二百五十人程度で、再就職は困難をきわめ、町の〝生き残り〟も〝再生〟も、先が見えない状態です。

八年余の闘いで勝利

沖電気争議団代表が来組

沖電気の解雇撤回闘争では、夏・冬の物品販売などに取り組んできましたが、五月十二日代表が来組、解決の報告とお礼がのべられ、パンフ（分会に配布）と団結旗が贈られました。

沖電気指名解雇撤回闘争 勝利解決の報告とお礼

貴労組におかれましては、益々ご健勝のことと存じます。

沖電気に対する指名解雇撤回、職場復帰を求める闘いは、みなさんの大きなご支援を頂き、三月十三日東京地方裁判所において和解が成立し勝利解決することができました。八年四カ月の長期にわたるご支援、ご指導に対して心からお礼を申し上げます。

和解の主な内容は

① 解雇が無かったものとして勤続を引き継ぎ、諸権利を回復して三十五人が職場復帰し、残りの者は円満退職する。

② 沖電気は和解金として十二億九千万円を争議団に支払う。

一九七八年十一月に強行された沖電気の指名解雇は、働く権利、生きる権利、団結する権利を一方的にうばい去るものであり、とりわけ成長する電機産業での指名解雇は、その後、人べらし合理化の手段として全国に広がる可能性をはらんだものでした。今回の解決は、指名解雇を撤回させ、その上で全員にはならなかったが、三十五人を現実に復職させた点で画期的な成果といえるものです。この勝利は、大企業の横暴な人べらし合理化攻撃に対する痛烈な反撃となり、全国の闘う仲間に大きな激励となることを確信します。

中央共闘会議に結集して闘われた全国の労働組合・働く仲間の統一した闘いの結果であり、多くの支援に励まされて八年余がんばり抜いた沖電気争議団七十一人の団結と奮闘の結果であります。

沖電気指名解雇撤回闘争は今回の和解成立で勝利、終結することとなりますが、中央共闘会議は沖電気が和解協定を誠実に履行することを見守りつつ、八王子・田中解雇事件等の早期解決を求めていくものです。

沖電気争議団が沖電気の職場で、そして新たな職場で貴重な経験を生かし、労働者の生活と権利を守り、労働組合運動の前進のために奮闘する決意を新たにしていることを申し上げ、八年余、沖電気闘争にお寄せ頂いた皆様に対するお礼のご挨拶とさせて頂きます。ありがとうございました。

沖電気争議支援中央共闘会議
事務局長　井川昌之
沖電気争議団
代　表　中山森夫

贈られた幅二メートルの赤旗